



人間性の実践

アメリカとロシアが冷戦後最大のスパイ交換を行ったのは、ウィーン空港だった。自分にとって「最も遠い人」は誰？そこに住むクルド系イラン人の女の子に尋ねると、少し間を置いて、イスラエル人、と答えた。アパルトヘイト撤廃から25周年を祝う南アフリカでは、色だけでなく、訛りが対立のしるしとなり、他のアフリカ諸国から来た人々への暴力というかたちで日常への不満が露わとなった。そんな社会で椅子の数や並べ方に思いを巡らせている頃、海の向こうでは、権利を求める人々がその微妙な違いをまとめて大きな力に異議を唱え、立ち向かっていた。ソビエト連邦の崩壊でその支配から自由になったラトビアでは、ラトビア語とロシア語がまちを二分し、旧ソ連につながるものを否定する人々は「～でない」ことで自分らしさを確かにしようとしていた。モスクワでの年越しでもらったマグと受け皿には、金のアクセントがついた青い編み目模様が施され、第二次世界大戦中にドイツ軍がレニングラードを包囲した時の、爆風から守る窓の目張りと空を照らすサーチライトをあらわしていた。

世界は大きく動いたし、動いている。そして複雑に絡み合っている。かつて民主化の道を辿った社会や自由を得た人々の今に見えるのは、新たな人との隔たり、また別の何かとの相容れない日常。その「反」の動きは、さまざまなかたちの人間らしさを明らかにする。逆らう、抗うという行為は深い感情に根ざしていて、そこで起きる摩擦は活気と熱意を与え、世界のなかの自分の存在を積極的に省み、実現し、心の動きが発露する、凝縮された瞬間のようにも映る。

「人」という漢字は腰の曲がった人をかたどっているけれど、二人の人が支え合う様子と解釈する方が多いかもしれない。ヨハネスブルクで触れたウブントゥは「人は他者を通してのみ人間として存在する」というアフリカの人生観。二つの遠い文化が会うところ。南アフリカでは、ウィーンで試した「即興の接触」という名のモダンダンスの基本の動きを使って、この世界観の重なりを身体であらわすよう試みた。相手の動きを受け取り、それに応える合気道から発想を得て、そのダンスは1970年代初めのアメリカで始まった。背中合わせの二人がお互い寄りかかり、支え合って、座り、立ち上がる。その試みのあいだには、成功とともにたくさんの失敗と誤解と新たな解釈があり、二人の間、居合わせた人々の間に感情のこもった触れ合いと表現の瞬間が生まれる。



《文字の動き》2019年、ワークショップ+インスタレーション（映像スタイル）

味覚喪失

パリの小さな部屋でインターネットから離れて静かに暮らし、朝ご飯を味わいながらの紙の読書を習慣にしていた頃、アメリカの作家リディア・デイヴィスの文に出会った。筆者はただ読みたいという思いで、自分の理解しない言語で書かれた小説を辞書を使わず、小さな糸口を拾い集め、想像を働かせて地道に読み解こうとすることでその言語を学んでいく。次の日本への渡航までもつように、毎日少しずつ読み、内側からの満たされているという信号を感じながら過ごしていた。

この春、ロシアから日本に戻る前に立ち寄ったロンドンで、散歩がてらハムステッドの本屋さんに向かい、リディア・デイヴィスの本を探した。あんず色の短編集と若草色の随筆集。つまみ読みをしてもどちらにするか決められず、坂を下った。まもなく界隈の多くの店が閉まり、昼も夜も救急車のサイレンが行き交うようになり、一日に一度散歩に出られることが贅沢な体験に変わった。留守の友人宅に独り、その日からずっと誰にも会わなかった。食糧の調達も簡単ではなく、空腹を感じて機能不全の社会に暮らしていると震災の記憶が戻ってきた。EUの永住許可と英国での日本人のビザ要件、それらの例外の狭間からこぼれおちる自分は、そこに居てよいのかもわからなかった。

毎日インターネットでニュースを読んでは息を詰まらせた。大きな不安の時を自分が存在しない場所でひとり過ごすのは限界に近かった。日本行きの便が運行停止となって思い立ち、ストックホルム行きの航空券を手配した。その数時間後、翌週には国境を閉じるとスウェーデン政府が発



表した。次々にフライトがキャンセルされ、閑散としたヒースロー空港から息苦しくなるような緊張感が漂う満員の飛行機に乗り、ストックホルムへ脱出した。



ロンドンから連絡を取ったキュレーターは数時間でオンライン理事会を開き、ストックホルムの「隔離レジデンス」に受け入れてくれた。親しい友人たちは皆リスクグループに所属している。最初の2週間の隔離の後も、誰にも会わない日々がずっと続いたけれど、一つ一つの動きが振り付けられているような圧迫感はない。一カ所に留まり、野菜を育て、保存できる食糧を買い、バナナワインの醸造を始め、動いてばかりの普段の生活ではできない暮らしを味わい、ロンドンでの感覚はゆっくりとだが薄れていく。

住んでいる界限と対岸の間には船が往復している。ほんの数分でも、船に乗って太陽を浴びながら向こう岸に渡ると旅をしているような解放感に浸れる。向こう側に渡って市立図書館の小さな分館を訪れると、英語で書かれた現代文学も本棚に並んでいる。リディア・デイヴィスのあんず色の短編集も。

辞書のように分厚い本の目次にはたくさんの題名とページ数が並んでいて、心に引っかかる言葉が題名に付けられた短篇のページを開けては読む。次の日も同じやり方で読む。同じ目次を見ているのに、目に留る言葉が昨日とはまったく違い、ひとつとして同じ短篇には辿り着かない。同じなのはサラサラと流れるように読めてしまうことと、「違う」という感覚。

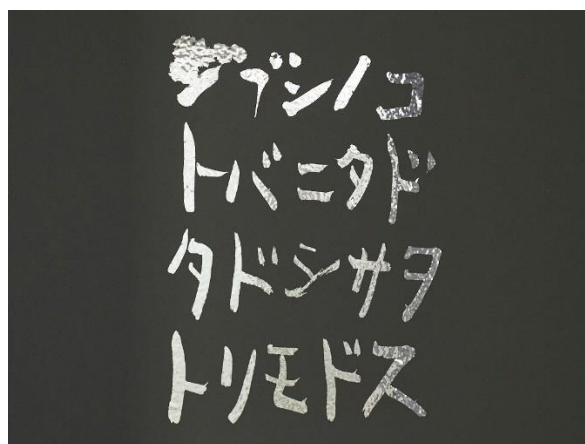


カウボーイと結婚したかったが、英語の教授で別の英語の教授の娘でもある自分から彼が何を求めるのかと綴り、新聞社の下っばとして働く自分を「ブルーカラー」と呼ぶ。透けて見える彼女の教養あるエリートとしてのアイデンティティーが鼻につき、好きになったその文体や視線も知的な遊びと突き放す、冷めた自分に気付く。パリでのように心が踊らない、心に添わない。味わうかわりにささくれを作っているようだったし、心狭く厭味な見方をしてしまう自分を貧しいと感じ、空しくなった。

未熟の回復

動く人々の生活の中には言語と文化の翻訳があり、その動きのなかで変わり、消え、加わるものをテコに、その襞に隠れている感情や逸脱、誤りとされているものをすくい上げるという試みを重ねている。この数年間続けているそのプロジェクトには『追熟と訛り』という名前をつけた。ヴァルター・ベンヤミンは翻訳の過程を樹から離れた果実がその後甘く、柔らかくなる様子に喩え、英語では訛りという言葉の変化をコラプション、腐ると捉えている。翻訳には自然界のゆるやかな動きと響くものがある。

自分がよそ者になる地を訪れ、そこで出会う人々とのワークショップや社会実験で人間の本能と積極性を引き出しながら、前の場所で生まれたものを次の場所の文脈でさらに育てることを繰り返す、その「転び」を享受する。母語を離れて多様な文化に感化されてきたことで築いた隔たりの実感と心情が、このプロジェクトの基礎にある。



《未熟の回復》2020年、ワークショップ+インスタレーション（インスタレーション風景）

撮影：高橋健治 画像提供：Tokyo Arts and Space



日本語がおぼつかなくなり、逆にさまざまな表現が新鮮に映るようになる。新しい環境に影響を受け、自分の考えが日本にいる人々のものの見方から遠ざかっていく。そうして身につけた、いくつかの言語の少ない語彙の狭間で考えを育てる。熟れているものからも、新しいものに慣れるまでにも隔たりがある。そんな状況をどう受け止めているのか。「正しい」言葉遣いから解放された、この二つのことばがしっくりときた。

自分のことばにたどたどしさを取り戻す

I got some accent in the way I look at the world (ものの見方がなまる)

そんなことばは、日本に根ざす人々にどうしたら響くのだろう。生活環境が大きく変わる状況は、海外移住のように自らが動くことで経験するものと思っていた。この春、人が動くかわりに世界が動き、他人に触れることの意味も変わってしまい、私たちの生活は多くの、そして大きな翻訳を必要とするようになっていく。

鮭の遡上

熟という字は、煮る、熟れる、慣れる、十分な状態に達するといった意味を持つ。しんの通った羊肉を人が煮込む様子をかたちどり、四つの点は燃え立つ炎をあらわしている。

世界で最も古い煮炊きの文化を示すものが、日本の北部で見つかったという記事を読んだ。出土した土器の内側には、鮭を煮た跡が残っていた。鍋で煮込む料理は多くの人に振る舞うことができ、世界中にその土地を反映したものがある。アフリカのバスの長旅では、途中で停車するたびに乗客みんなで鍋を囲み、次の地へと向かうと聞いた。トウモロコシのお粥を指でこねながら、みんな輪になり食べた南アフリカのポイキコ。人が入れるぐらいの大きさのものもある、三本足で立つ金属の鍋で煮込む。

そんな鍋は古代中国にもあって、鼎という漢字に描かれている。この字に出会ったのは鼎談という言葉のなかで、その鼎という鍋の脚のように三人が向かい合って話し合うこと。二人のときは違う躍動が生まれる。郷という字は、ごちそうを間に二人が向かい合っている様子をかたちど



り、田舎、ふるさと、受ける、響く、向かう、先にといった意味を持つ。椅子を向かい合わせに並べると、お互いが見える。椅子を横に並べると、同じ景色が見える。椅子は二つでも三つでも、どんな並べ方でも、そこに座る人々をつなげるものは何だろう。対立が占領する日常で何度も浮かんだ問いについて思いを巡らせていた頃、母国のお隣り、韓国へのお誘いが届く。

世界を分け、他者を遠ざけ、見えないものに抗う行為は、とらえどころのない人生の不条理を生きる私たちの「最小公約数」かもしれない。そして、誰もが経験し、抗うことのできない老いも。熟成、発酵という有機的な現象とそれがもたらす若さを保つ効能という、相反する動きを合わせ持つ韓国の食べものを並べて、その社会における老いの受容と抵抗を見つめ、人間の本質について反芻したい。フィンランドとの国境に近いスウェーデンの離島で時を過ごししながら、その想いを膨らませている。